

# 新聞を活用した総合的な学習の時間

## —アクティブ・ラーニングを意識した授業—

(平成 27 年 8 月 31 日提出, 平成 27 年 10 月 20 日受理)

## Periods for integrated study utilizing newspapers

### —Considering the active learning lessons—

奈良学園大学人間教育学部

森 一弘

MORI Kazuhiro

Nara-Gakuen University

Faculty of Education for Human Growth

キーワード：アクティブ・ラーニング, 総合的な学習の時間, 新聞の活用

**Abstract** : Four points of the making of class of “the period for integrated study” when I utilized a newspaper.

- ① I make the environment where children pick up a newspaper anytime.
- ② I let you find an interesting article without letting a child overdo it.
- ③ I read, and a teacher makes a newspaper the teaching materials to let children be interested in a newspaper.
- ④ I guarantee the independent action by the child.

Based on this point, I want to demand the realization of bringing up a manner working on “a cooperation mark” by “inquisitive learning”.

**Keywords** : Active learning, Period for integrated study, Use of newspaper

## 1. はじめに

総合的な学習の時間については、小学校学習指導要領に「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通すこと」「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成すること」「学び方やものの考え方を身につけること」「問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てること」「自己の生き方を考えることができるようにすること」の5つを目指し実施されている。

また、平成 20 年の指導要領の改定に伴い、総合的

な学習の時間において特に「探究的な学習」となることを目指している。このことを目標において明示するとともに、内容の取り扱いにおいても「探究的な学習」「探究活動」「問題の解決や探究活動の過程」などとして数カ所に示された。

探究的な学習とは、小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編に「物事の本質を探って見極めようとする一連の知的な営みのことである」と示されている。そして、探究的な学習とするためには学習過程が、<課題の設定><情報の収集><整理・分析><まとめ・表現>になることが重要であると指摘した。子どもの学習の姿として、事象をとらえる感性や問題意識

が揺さぶられて、学習活動への取り組みが真剣になる。身につけた知識や技能を活用し、その有用性を実感する。見方が広がったことを喜び、さらなる学習への意欲が高める。概念が具体性を増して理解が深まる。学んだことを自己と結びつけて、自分の成長を自覚したり自己の生き方を考えたりする。このように探究的な学習においては、子どもたちの豊かな学習の姿が現れるとした。

探究的な学習として、子どもたちの学習内容の質の高まりをもたらせるために「協同的に学ぶ」ことを重視することも指導要領には示された。

具体的には、【多様な情報を活用して協同的に学ぶ】【異なる視点から考えを協同的に学ぶ】【力を合わせたり交流したりして協同的に学ぶ】と示された。これは、個の学びと集団での学びが互いに響き合い質の高い学習を成立させることを求めたものである。

次に、「アクティブ・ラーニング」については、平成26年11月に文部科学大臣より中央教育審議会に「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について」の諮問がなされた。諮問理由に、今後の社会は激しく変化し子どもたちの未来はより厳しい状況が予想されるとした上で、こうした時代を乗り越え未来を切り開いていく力が必要であるとした。

特に学ぶことと社会とのつながりを意識し「何を教えるか」という知識の質や量の改善に加え、「どのように学ぶか」という学びの質を重視することを審議するように求めた。その視点の一つに「アクティブ・ラーニング」の具体的な在り方を取り上げている。

「アクティブ・ラーニング」については、中央教育審議会への諮問文に「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」と意味づけている。この意味においては現行の指導要領の総則や前述した総合的な学習の時間においても「体験的な学習や知識・技能を活用する問題解決的な学習」「自主的・自発的な学習」「学習課題や活動の選択」「探究的な学習」「協同的な学習」などが示され、これらの充実が求められている。すなわち、現行の教育課程においても「アクティブ・ラーニング」を重視しているともととらえられる。

本稿では、総合的な学習の時間の授業実践を報告し、アクティブ・ラーニングが重視される、教育課程改訂への備えとなるよう、授業づくりのポイントを提案したい。

## 2. 「アクティブ・ラーニング」とは

平成24年8月に出された中央小教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」に関する用語解説に次のように示されている。

“教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。発見学習、問題解決学習、調査学習が含まれるが、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法である。”

これ以外にも、(溝上, 2007)は、アクティブ・ラーニングを「学生の自らの思考を促す能動的な学習」とゆるやかに最広義で定義している。この背景には、データベース CiNii を用いて分析した結果、アクティブ・ラーニングという用語は包括的な概念であって、実際それは「学生参加型授業」「協調／協同学習」「課題解決／探求学習」「能動学習」などと、扱う力点の違いによって様々な呼ばれ方があると指摘している。

これらのことから、アクティブ・ラーニングについては、定まった定義はされておらず、捉え方として「課題の発見」「課題の解決」「主体的な学習」「協同的な学習」「能動的な学習」「問題解決的な学習」「発見学習」「体験学習」などの用語を用いることができるといえる。

## 3. アクティブ・ラーニングと総合的な学習の時間の関連

小学校指導要領に示された総合的な学習の時間の「目標」は、まさしくアクティブ・ラーニングそのものといってもいいのではないかと考える。

### 「目標」から

横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする。

### 「指導計画の作成と内容の取扱い」から

2-(2) 問題の解決や探究活動の過程においては、他者と協同して問題を解決しようとする学習活動や、

言語により分析し、まとめたり表現したりするなどの学習活動が行われるようにすること。

2-(3) 自然体験やボランティア活動などの社会体験、ものづくり、生産活動などの体験活動、観察・実験、見学や調査、発表や討論などの学習活動を積極的に取り入れること。

2-(4) 体験活動については、第1の目標並びに第2の各学校において定める目標及び内容を踏まえ、問題の解決や究活動の過程に適切に位置付けること。

2-(5) グループ学習や異年齢集団による学習などの多様な学習形態、地域の人々の協力も得つつ全教師が一体となって指導に当たるなどの指導体制について工夫を行うこと。

2-(6) 学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと。

2-(7) 国際理解に関する学習を行う際には、問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、諸外国の生活や文化などを体験したり調査したりするなどの学習活動が行われるようにすること。

2-(8) 情報に関する学習を行う際には、問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、情報を収集・整理・発信したり、情報が日常生活や社会に与える影響を考えたりするなどの学習活動が行われるようにすること。

(下線は、筆者)

このように、学習指導要領では、その目標、指導計画の作成と内容の取扱いなどにおいて、アクティブ・ラーニングを重視している記載が見られる。

#### 4. 新聞活用の実践から

本実践を行った学校は、A市の山手に位置し、地元の人々が昔から居住している伝統ある地域である。したがって、保護者の協力や理解が得られやすく、また、家庭的には裕福な環境であるといえる子どもが多く住む地域である。

このような地域的な背景のもと、子どもたちに新聞に興味を持たせ、そこから視野を広げるための実践を試みたいと考えた。本稿では、6年生の子どもたちを対象にした実践を報告する。

小学生が新聞というメディアに対してどのような意識を持っているのか、また、どのくらいの子どもたちが日々新聞と接しているのか、そして、新聞をどのよ

うに活用しているのか、子どもの実態を観ながら取り組んでいった。

実態を通して、見えてきたことをもとに、次の三つの視点を設定し実践を行ってきた。

☆子どもたちに新聞へ興味を持たせるための活動とは、どのようなものがあるのか。

☆子どもたちが新聞から学び取ることは可能であろうか。

☆子どもたちが新聞を活用し自分の生き方に取り入れることが可能であろうか。

このような三視点を設定し、実践を行った。その取り組みの実際を報告する。

(1) 子どもたちに新聞に興味を持たせるための活動とは、どのようなものがあるのか

##### ① 子どもの主体的な活動にする！

9月から新聞が配達されることになり、子どもたちと新聞の置き場について話し合いを持った。これは、子どもたち自身が決めることで、新聞への興味を広げることにつながると考えたからである。話し合いの結果、全校生が読める場所として図書室へ置くことになった。また、係を決め、図書室に設置した新聞ラックに朝刊を整理することになった。

図書室で読み終えた新聞はクラスに持ち帰り、新聞社ごと、日付ごとに整理し、朝の読書タイム、休み時間など自由に読める環境をつくった。

いつでも身近に新聞を手にとることができ、整理整頓を行うのは子どもたちという環境づくりを行うことで、子どもたちが新聞を手に取り読む姿が見られた。興味を持ち始めた子どもたちであると考えられる。

##### ② 朝の読書タイムを利用する！

実践校では、毎日朝の会の始まる前10分間(8時30分から8時40分)を読書タイムとして子どもたちの興味ある本を自由に読んだり、PTAの協力で保護者による「読み聞かせ」の活動があったりする。今回、NIE推進協議会より新聞の提供を受けたことで、子どもたちと話し合い朝の会の時間に新聞を各自で読むことにした。子どもたちは時間が来ると各自で新聞を取り、興味ある記事を読み、新聞から自分なりに感じたことを心にとどめるようになった。

##### ③ 日番が朝の会で、新聞の記事から興味を持ったことを素材にスピーチをする！

10月に入り子どもたちから、朝の会でのスピーチの内容に新聞の記事の話題が多くなってきた。これまでは、学校であった事、家での出来事などを素材にス

ピーチを行っていた子どもたちであったが自然発生的に新聞の記事を素材にスピーチを始めたのである。このことは、私にとっても興味深い出来事であった。新聞を読むという環境が、誰かに話をしたいという状況を生み出したのである。

ただ、私自身、朝の会の話題をあえて新聞の記事の内容を選び子どもたちに話をしてきた。もしかすると、このような教師の日々の取り組みが子どもたちに影響をしたのかもしれない。

## (2) 子どもたちが新聞から学び取ることは可能であろうか

### ① 興味ある記事へ自分の感想を書き壁新聞にまとめる！

#### 〔新聞記者派遣事業からの発展〕



【子どもたちがまとめた壁新聞】

子どもたちに、新聞へより興味を持たすため、班ごとに新聞を読み、班員全員が興味のある記事を選び、その記事を書いた記者の思いを読み取っていく活動を行った。

この取り組みは、NIEの活動である「記者派遣事業」から、子どもたちは影響を受けたものである。話を伺った記者の方から、「それぞれの記事には、取材した記者の思いや願いが入り読者に伝えたいことがある。」という思いを知った。このことを利用し、子どもたちに班単位で、興味ある記事を選ばせ、その記事に対して、記者の思いを推察し、自分の言葉でまとめさせた。

この取り組みは、話し合いのよる合意形成、興味ある記事の選択に意味を持たせた。

子どもにとって取り組みやすいのは、個人で興味あることを見つけさせ、まとめていく活動であろう。しかし、これでは個人の活動に終始し、個人でスクラップをしていくという取り組みと同じであり、集団で学びあう学校で行う必要はないと考えた。

班員4人で話し合いながら、興味ある記事を探し、それぞれが自分の考えを出し合うことで、記事の読み方、事象の見方に深まりが出てくると考えたのである。(批判的思考の発揮)

この取り組みの様子を見ていると、子どもたちが興

味を示す記事の多くは、将来につながる記事であり、自分たちが将来出あうことになる内容に興味を持っていたのが特徴的なことであった。

例えば、「リニアモーターカー」「ヒト型ロボット」の記事を取り上げ、記者の人が、未来の社会の様子を読者に想像するように促しているように感じるなどの感想を持つことができた。

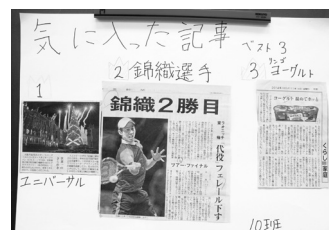
このことから、新聞を読むことによって、未来の社会の様子が、子どもたちなりに想像でき、それに対応できる態度や知識が自然と育成されることにつながるといえる。

### ② お気に入りの記事にランキングをつける！

この取り組みは、まずは各人でお気に入りの記事を見つけ出し、その記事がなぜ自分にとってお気に入りのかを班員に語り、集まった記事の中から班で3位までのランキングをつける取り組みである。左にある写真のように子どもたちの興味は、幅広く、沖縄の基地問題、スポーツ選手の活躍、人間同士のトラブル事件、テーマパークについてなどが1位となった。

ランキングをつけることで、子どもたちはより興味のある記事はないかという思いが強まり、新聞の端から端まで読み込んでいこうとする意識が高まり、知らなかった事実や考え方を新聞から学び取っていく姿が見られた。

お気に入りの記事を見つけ出す取り組みの中で、朝



【お気に入りの記事ランキング】



子どもたちは、「世界の子どもたちのために、私たちが今できること。」を真剣に考え、「楽しいから」「やってみたいから」という思いで募金活動をするべきではない。また、ただ単に、「募金をお願いします。」という呼びかけで募金活動をするのは、「私たちが調べた、子どもたちの現状を伝える。」ことはできない。このような話し合いが続き、募金活動ということの本質的な価値を追究した結果となった。

実際には、卒業を2週間後となった時期に、午後からA市の駅前で募金活動を実施した。自分たちが調べた世界の子どもたちの現状をポスターにまとめ町の人々に聞いていただき、賛同を得た人に募金をしていただくということになった。募金活動の時間は45分間(授業時間と同じ)とし、5つのグループに分かれ実施した。最終的には、28,674円の金額が集まり、全額ユニセフへお渡しし、子どもたちの活動は終了した。

#### (4) 授業実践のまとめ

今回、兵庫県NIE推進協議会の協力のもと、子どもたちへ新聞というメディアに興味を持たせ、自分たちの生き方につなげていく試みを実践した。取り組んだことで判明したことは、次の通りである。

**☆新聞を子どもたちがいつでも手に取る環境が必要である。**

各家庭では、新聞を購読していない環境が多くなっている。この場合、ネットでニュースを見ているという実態があった。公教育の中で新聞を活用するための予算不足、若手教員の活字離れなどの課題も目の前にある。

教育の一環として、新聞が学校現場に配達され、いつでも見ることができる環境整備を模索していく必要がある。

**☆子どもに無理をさせず、興味ある記事を見つけさせることが必要である。**

子どもは記事の7割以上に興味がないと思っている。このような状況を把握し、発達段階に応じ無理なく、子どもの興味を最大限に活かしていく取り組みを行うことが必要である。教師の思いが強くなり過ぎると子どもの思いとずれが生じる可能性が高く、記事をリライトするなどの教材化も必要である。

このことと同時に、子どもたちの主体的な取り組みにしていく必要も大事な要因である。

**☆子どもたちに新聞に興味を持たせるには、教師が授業化していく必要がある。**

このことは、当然といえば当然のことである。環境を整備することで、自然発生的に興味を持つ可能性があることは今回の取り組みで明らかになった。しかし、自然発生だけでは、子どもの思考の深まりを育成できない。

教師自身が琴線に触れる、子どもにとって価値ある記事をもとにして、教材化、授業化を仕組む必要がある。記事選びの視点として、

- ・子どもにとって身近な素材であること。
- ・子どもが自分たちで調べたり、活動ができたりしそうな素材であること。
- ・集団で考えることで内容が深まる素材であること。  
(すぐに答えが出たり、答えが一つではなかったりする素材)

このような記事を素材にするとよいのではないかと今回の実践から考えることができた。

若手教員の活字離れ、新聞離れが危惧させるが、各学校で地道に実践していくことが、子どもたちが自分たちで課題を持ち、その解決に向けて行動していくことにつながる最短距離だと感じた。

**☆最も必要なことは子どもによる主体的な取り組みを保障することである。**

教師の一方的な指導は、子どもたちに思考を停止させる場合がある。常に子どもの思いを受け取りながら主役である子どもを前面にした取り組みを行いたいものである。

## 5. おわりに

総合的な学習の時間を使い授業実践を実施した。

新聞記事をもとにして、自分に興味あることを出し合いながら、クラス全員で調べてみたいことやってみてみたいことを話し合い、主体的に取り組んでみたいという思いを持たせることが、「アクティブ・ラーニング」の出発点である。教師の教えたいということが先走っていくと、子どもは受動的になり課題を生み出すことなく、待ちの姿勢で授業に望むことになる。本実践からも、このことは明らかである。

次に、課題を主体的に生み出していくと、調べてみたい、調べたことをより深めるために、友達と交流してみたい、という思いが生成される。ここではグループでの学習が主になる。

白石(2011)は、グループ学習の形態別分類として、**共同 Collaborative Learning**：複数の人が、同じ目的のために一緒に考えたり作業をしたり、同じ条件で関わる学習形態。

**共働 Cooperative Learning**：複数の人が力を合わせて物事を行う学習形態。共同と同義。

**協同 Collaborative Learning**: 同じ目的のために、対等の立場で協力してともに学ぶ学習形態。

**協働 Cooperative Learning**：複数の人が互いに協力し合う学習形態。特に利害や立場などの異なる者同士が協力し合う。

以上の4つの分類を示している。また、指導要領では「協同」中教審諮問文には「協働」のように、「きょうどう」という言葉についても規定が定かではないことが現状である。

このように、アクティブ・ラーニングという学習形態は、立場が変われば、それぞれの捉え方が違っていることが現状である。しかしながら、子どもが主体となり「授業が楽しい。みんなで考えるといろいろな考えが出て、新しい友達の発見がある。」という子どもたちの感想に触れると、アクティブ・ラーニングを意識した授業づくりの手応えを感じる。

授業の形態が、教師主導の説明と黒板への板書、知識だけ問うテストの繰り返しでは、21世紀の未来を生きる子どもたちの力を育成できないことだけは、明らかであろう。実践を通していえることは、子どもの資質や能力をどのように育成していくのかを学校組織で願いや希望をつくりあげ、子どもたちとともに創り上げていこうとする授業づくり、環境づくりが必要である。そしてなにより、教師が一人だけで考えるのではなく、協同でアクティブ・ラーニングの学びを行うことが今求められているのではないだろうか。

## 参考文献

- 文部科学省.(2008). 小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編. 平成20年, 8, 187.
- 溝上慎一.(2007). アクティブ・ラーニング導入の実践的課題.
- 白井靖敏.(2011). アクティブラーニング(グループ学習)の経験に基づく学習タイプ. 名古屋女子大学紀要, 57.